実践に役立つ教育資料

—最近の研究紀要・資料から—

教育センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料を五つ、御紹介します。

「PISA型『読解力』向上を目指した指導の工夫」に関する研究

熊本県教育センター(2008年1月)

ＰＩＳＡ型「読解力」向上のための、単元を見通した授業モデルを提案しています。問題解決型学習を特性とする社会科・理科の授業について「読解力」向上の視点で学習をデザインすることで、基礎・基本の徹底が図られるとともに、児童生徒の論理的思考力・表現力を高めることができたと結論付けています。

ここでは、「読解力」から「確かな学力」、「熊本型授業」に迫るように工夫しています。そこで、自己の成長に対するメタ認知や実生活・実社会との関連などを授業改善の視点として挙げ、さらに、複数のテキストの比較・関連するなどの表現力・思考力を高める各種のアプローチを試みています。

「みんなの笑顔が見たいとき」
（豊かな人間関係づくりをめざしたコミュニケーション能力の育成に関する調査研究）

厚木市教育研究所(2007年6月)

①セルフエスティーム（自尊感情）　②傾聴（心を傾けて聞く）　③アサーション（さわやかな自己主張）　④リレーション（ふれあい）　の四つのキーワードを基盤に、教師用の実践プログラム集“Let's こみゅにけいと！「ひらく」”を作成しています。小・中学校で行う教育活動の様々な時期や場面に応じて、いつでも・どこでも活用でき、子どもたちのコミュニケーション能力伸ばし育てる手立てになることができると考えます。

大村はまとコミュニケーション　——「教えるということ」を中心資料として——

言語教育振興財団　(2007年10月)

大村はまの「教えるということ」をもとに、大村はま国語教室の源流をたどったものです。特に、コミュニケーションという視座から国語教室を見直し、講演でのエピソードや豊富な語りの例をもとに、教師の仕事について深く見つめています。彼女の「身の程知らずに伸びたい」子ども一人一人の中に入り込んで、その子どもになりきろうとした姿や、束にして教えるのではなく、教育は個人を伸ばすことが中心だと言い切る言葉に、今の教育を改めて問い直すことができるのではないでしょうか。

「総合数学」での試み　――多面体を教材の柱とした18年度の実践から――

東京学芸大学附属高等学校附属大泉校舎(2007年12月)

「総合数学」とは学校独自の科目です。そこで、年度を通して内容に中心となる柱を設定し、その内容にかかわることを学習しながら、数学の様々な領域にかかわる話題を取り上げる実践を試みています。1学期における黄金比、正五角形とその作図法、多面体とその特徴、オイラーの定理、2学期における多面体の双対性、正十二面体の塗色、3学期におけるスライドゲーム等を通して、多面体を幹としながら教材を組み立てています。 授業の中で、多様な活動で獲得した知識や理解を次の探求に結び付けることを意図しており、高等学校のみならず、小・中学校での実践にも応用できる部分があると考えます。

学びのフォームとスキルを育成を取り入れた「学び方学習」の指導
――各種テキストの開発と活用――

文教大学教育研究所(2007年12月)

「学びのフォーム」を「型、態度、姿勢、在り方・生き方」として、「学びのスキル」を「技能、テクニック」と区分して分析するとともに、開発と実践を行っています。例えば、授業中のモットーとして「メモを取る。言葉をもぎ取る(受け身で聞かない)」などの「授業の受け方」について具体的に述べられています。著者は高等学校の教頭先生ですが、小学校の授業参観の体験から学んだことを生かして考察するとともに、小・中・高・大の連携を訴えながら、「子どもの学び方」について論じています。

また、福島県教育センター Web の検索システムを活用し、必要な図書、文献、研究資料の検索番号やキーワードを御連絡いただければ、こちらで準備して発送します。是非御活用ください。

※　教育資料等のお問い合わせについては、カリキュラムセンター（内線 33 番）までお願いします。